高校運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化： 3 時点での交差遅れ効果モデルによる検討

渋谷 崇行¹⁾ 西田 保²⁾ 佐々木 万丈³⁾ 北村 勝朗⁴⁾ 磯貝 浩久⁵⁾

Takayuki Shibukura¹, Tamotsu Nishida², Banjou Sasaki⁴, Katsuro Kitamura⁴ and Hirohisa Isogai⁵: Analysis of psychosocial skills in high school extracurricular sports activities and their generalization to student daily life using a three-point cross-lagged panel. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: This study examined the psychosocial skills of high school extracurricular sports activities and their generalization to student daily life. In a preliminary study, we collected a wide range of psychosocial skills related to extracurricular sports activities experienced by members of high school sports clubs, and then selected questionnaire items that would be used in the present study. In Survey 1, a confirmatory factor analysis was conducted using data collected from 376 members of high school extracurricular sports clubs (265 males, 111 females) to develop two scales, one measuring psychosocial skills in extracurricular sports activities, and the other psychosocial skills in daily life. The validity and reliability of these two 9-subscale tools, both of which comprised the same items, were thus confirmed. In Survey 2, the two scales developed in Survey 1 were used to conduct three surveys of the same subjects over an interval of about 3 months, in order to determine the causal relationships between the psychosocial skills used in extracurricular activities and those used in daily life. A cross-lagged effect model was used. The study subjects were 137 high school students who were members of extracurricular sports clubs (73 males, 64 females). The results showed that the psychosocial skills needed for extracurricular sports activities could be generalized to student daily life. Generalization in the reverse direction, i.e. from skills used in everyday life to those used in extracurricular sports activities, was also evident. Furthermore, the results suggested that psychosocial skills used in extracurricular sports activities had a cyclical causal relationship with the skills used in everyday life. Finally, the significance of extracurricular sports activities and methods for actualizing this significance was discussed based on the study results.

Key words : life skills, panel study, longitudinal research

キーワード：ライフスキル、パネル調査、縦断調査

Ⅰ 問 題

青少年がスポーツ活動を行う主な場の 1 つに運動部活動がある。生徒が運動部活動を行う意義に

ついては様々な見方があるものの（例えば、清水, 2006；運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議, 2013）、概して、参加者が生涯にわたって健康であるための幅広い人間形成を行うことにあるといえる。そして、その効果としては

- 1) 桐蔭横浜大学大学院スポーツ科学研究科
〒 225-8503 神奈川県横浜市中区青葉区鉄町 1614
 - 2) 愛知学院大学心身科学部
〒 470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12
 - 3) 日本女子体育大学体育学部
〒 157-8565 東京都世田谷区北烏山 8-19-1
 - 4) 日本大学理工学部
〒 274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1
 - 5) 九州産業大学人間科学部
〒 813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1
- 連絡先 渋谷崇行

1. Graduate School of Sport Sciences, Toin University of Yokohama 1614, Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama, Kanagawa, 225-8503
 2. Faculty of Psychological and Physical Science, Aichi Gakuin University
12, Arai-ke, Iwasaki-cho, Nisshin, Aichi, 470-0195
 3. Faculty of Sports and Health Sciences, Japan Women's College of Physical Education
8-19-1, Kitakarasuyama, Setagaya-ku, Tokyo, 157-8565
 4. College of Science and Technology, Nihon University
7-24-1, Narashinodai, Funabashi, Chiba, 274-8501
 5. Faculty of Human Sciences, Kyushu Sangyo University
2-3-1 Matsukadai, Higashi-ku, Fukuoka, 813-8503
- Corresponding author shibukura@toin.ac.jp

身体的な効果に加えて、心理社会的な効果も大いに期待されている。例えば、運動部活動に参加することによって、他者を尊重し他者と協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心、それに実践的な思考力や判断力等を育むことが期待されている（運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議，2013）。このような、参加者の対人関係や自己コントロールに関わる能力を高められることは、人格形成に寄与するスポーツ活動の心理社会的効果といえる。とりわけ、高等学校の運動部活動に注目すると、高校生は発達段階において青年期にあたり、精神的な側面では子供から大人への移行期にある（猪俣，2011）。したがって、その年代の経験が人格形成や生涯発達に及ぼす影響は大きく、運動部活動の心理社会的効果を楽しむことの意義は、高校生において極めて高いといえる。

スポーツ活動の心理社会的効果は、これまで主にライフスキル（Life skills）^{注1）}の観点から検討されることが多かった。WHO（1997）によれば、ライフスキルとは「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力である」と定義される。また、Danish et al.（1995）は「人々が現在の生活を自ら管理・統制し、将来のライフイベントをうまく乗り切るために必要な力」と定義している。ライフスキルを構成する中核的要素としては、意志決定、コミュニケーション、問題解決、ストレスマネジメント等があげられるが、スポーツ活動はこのようなライフスキルの獲得に貢献すると考えられてきた（Danish et al., 1993）。その一方で、単にスポーツに参加すればライフスキルが身につくというわけではなく（Bakker, 1999; Ewing et al., 2002; Hodge and Danish, 1999; Shields et al., 2002; Weiss, 1995），スポーツ活動に内在する経験内容がライフスキルの獲得に影響を及ぼすことも指摘されてきた（Papacharisis et al., 2005）。このようなことから、参加者は運動部活動で多様な経験をする中で、ライフスキルと関係が深い様々な心理社会的効果を享受していることが推察される。同様の関心から、我が国でも運動部活動とライフスキル獲

得との関係についての研究が行われ、これまでにライフスキルの構成要素やその尺度化、さらにはライフスキルの獲得プロセスに関する知見が導かれてきた。

例えば、上野・中込（1998）は高校運動部員用のライフスキル尺度を作成し、運動部活動参加者は一般生徒よりもライフスキルの獲得レベルが高いことを明らかにした。また、島本ほか（2013）は大学生アスリート用ライフスキル尺度を開発し、大学運動部活動におけるスポーツ経験がライフスキルの獲得に影響を及ぼしていることを示した。このように、運動部活動を行う高校生や大学生を対象とした研究からは、スポーツ活動はライフスキルの獲得に効果があるとの見方が概ね支持されてきた。その一方で、スポーツ活動で心理社会的スキルが獲得されたとしても、適切な介入をすることなしにそれらは日常生活に般化しないことも指摘されてきた（Danish et al., 2004; Gould, 2001; Hodge and Danish, 1999; Papacharisis et al., 2005; 杉山, 2004; 杉山ほか, 2008）。すなわち、運動部活動における心理社会的スキルの適用範囲は運動部活動に限定されたものなのか、それとも、それ以外の場面でも適用されるものなのかということについてはさらなる検討が必要であり、心理社会的スキルの般化の実態や般化メカニズムの解明、さらには般化を目指した介入など、実証的な研究を行うことが課題として残されている（西田, 2004; 佐々木ほか, 2013; 杉山ほか, 2010; 上野, 2011）。このようなことから、本研究では、般化を「ある特定の環境で学習したことが、他の様々な場所や環境でも適用できるようになること」と定義し、運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化について検討していく。具体的には、運動部活動における心理社会的スキルと日常生活における心理社会的スキルとの因果関係を検討することによって般化の実態を探っていく^{注2）}。なお、本研究では、青年期の発達段階にあり、人格形成や生涯発達において重要な影響を受ける時期である高校生の運動部活動に焦点化して検討を行う。

ところで、因果関係の検討において、縦断調査

の有効性が指摘されている。縦断調査は時間的先行性に関する情報を得ることに優れており、横断調査と比較すると変数間の因果関係をより確からしく推定することが可能である（高比良ほか、2006）。近年は、縦断調査の1形態であるパネル調査によって得られたデータを交差遅れ効果モデル（Cross-lagged effect model）を用いて分析することで、因果関係の検討を行う研究が多くみられるようになった。ここで、パネル調査とは同一の質問項目を一定のインターバルを空けて複数回実施するものである。また、交差遅れ効果モデルとはパネル調査によって得られたデータから変数間の因果関係を推定する統計的手法である（Finkel, 1995）。仮に2変数を2つの時点で調査を行った場合には、1時点目の2変数の値が1時点目から2時点目における2変数の値の変化に及ぼす影響をモデルに取り込んで因果関係を検討する。また、因果関係の推定において「変数X→変数Y」と「変数Y→変数X」の因果関係を双方向的に検討することも可能である。例えば、心理社会的スキルの般化は運動部活動から日常生活へという方向性がある。その一方で、日常生活から運動部活動へという方向性も想定することは可能である。仮にそのような関係がみられた場合には、心理社会的スキルに関わる指導は、部員の日常生活にも配慮することが大切ということにもなる。ところで、2時点で測定を行うパネル調査に対しては「2波のパネル調査」という呼称が一般的に用いられるが（高比良ほか、2006）、3波のパネル調査を行うことにより、「運動部活動→日常生活→運動部活動」という循環的な因果関係を検討することも可能になる。すなわち、「運動部活動における心理社会的スキルが日常生活でも適用されるようになり、そしてそのことがさらに運動部活動でも適用されるようになる」という循環的な般化についても検討することが可能になる。これまでも、心理学研究の様々な分野で交差遅れ効果モデルが用いられ（例えば、安藤ほか、2004；安藤ほか、2005；西野ほか、2009；島本・石井、2010；高比良ほか、2006；高坂、2013）、因果関係の双方向性を踏まえた多様な検討が行われてきた。以

上のことから、運動部活動と日常生活における心理社会的スキルの因果関係を検討する本研究において、交差遅れ効果モデルは有用な分析モデルとなることが期待できる。

本研究で運動部活動における心理社会的スキルの般化を検討するにあたり、運動部活動と日常生活の各場面における心理社会的スキルを測定する尺度が必要である。これまで、高校運動部員（以下「部員」と略す）用として開発された同種の尺度には上野・中込（1998）によるものがある。しかし、下位尺度は「個人的スキル」と「対人スキル」のみであり、この尺度で多様な心理社会的スキルを包括的に捉えることは不可能である。また、体育授業におけるスポーツ活動（島本・石井、2009）や競技活動（島本ほか、2013）を行う大学生の心理社会的スキルを測定する試みもなされたが、そこで用いられた尺度はスポーツ活動という特定の場面における心理社会的スキルを評価するためのものではなく、大学生が効果的に日常生活を過ごすために必要なライフスキルを評価するために開発された尺度であった。なお、ここでの日常生活の捉え方は、スポーツ活動や運動部活動を含む大学生の日々の生活全般が想定されていると考えられた。したがって、本研究では運動部活動の多様な心理社会的スキルを捉えることが可能な高校生用の尺度を作成する必要がある。その際、本研究では般化を「ある特定の環境で学習したことが、他の様々な場所や環境でも適用できるようになること」と捉えるため、運動部活動と日常生活における心理社会的スキルは同一内容であることが求められる。したがって、各尺度は同一の項目内容で構成されることが望ましい。

本研究の意義としては以下のことが指摘できる。第1は、運動部活動の意義の明確化に向けた貢献である。運動部活動には、豊かな人間性や社会性の育成といった幅広い人間形成に寄与することが期待されている（日本体育協会指導者育成専門委員会、2007；運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議、2013）。したがって、運動部活動における心理社会的スキルは運動部活動にとどまることなく、日常生活にまで波及することに

よってその意義を見出すことができるといえる。本研究では、運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化が検討される。このことによって、運動部活動における心理社会的スキルが運動部活動場面に限定的なものではなく、様々な場所や環境で適用されるものであるということが指摘されることになる。第2は、般化メカニズムの解明に向けた研究上の貢献である。本研究では運動部活動と日常生活における心理社会的スキルの因果関係が検討される。このことによって、般化しやすい、あるいは般化しにくい心理社会的スキルが推定されるとともに、般化の影響要因を推測することも可能になる。本研究は心理社会的スキルの般化メカニズムの解明に向けた基礎的資料を提供するものとして位置づけることができる。第3は、運動部活動における心理社会的スキルの般化を促進する、効果的な指導方法の提案に向けた実践上の貢献である。従来から、運動部活動を始めた青少年のスポーツ活動は、人間形成に効果的であるといわれてきた。しかし、その具体的な指導方法が提案されることはほとんどなかった。その理由は人間形成を捉える視点が曖昧であったことや、人間形成を促進させるプロセスに科学的根拠が乏しかったことなどが指摘できる。このような問題に対して、本研究で取り上げる心理社会的スキルは、青少年がスポーツ活動を行うことによって育むことが期待される人間形成の要素と深く関係している。そして、その日常生活への般化プロセスの理解が進むことによって、運動部活動における心理社会的スキルの般化に向けた効果的な指導方法を検討することも可能になる。このようなことから、本研究は運動部活動における心理社会的スキルの適用範囲を様々な場所や環境に広げていくための指導上の手がかりを提供するものである。

本研究の目的は、運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化について検討することであった。予備調査では、本研究で用いる尺度項目の収集と選定を行った。調査1では、運動部活動と日常生活の各場面に適用可能な心理社会的スキルを測定する尺度を作成した。調査2では、

調査1で作成された2つの尺度を用いて同一の対象者に3カ月程度のインターバルを空けた3回の調査を実施し、運動部活動と日常生活における心理社会的スキルの因果関係を交差遅れ効果モデルを用いて検討した。

II 予備調査

1. 目的

部員とその保護者、指導者を対象とした自由記述式の調査を行うことによって、運動部活動における心理社会的スキルに関わる項目を収集し、調査1で行う尺度作成に必要な項目選定を行った。

2. 方法

2.1 調査対象者

N県の公立高等学校3校に所属する1年生から3年生までの部員（活動種目は、野球と陸上競技^{注3)}）とその保護者、そして、N県の公立高等学校5校に所属する運動部の指導者（指導種目は、野球、サッカー、ソフトボール、陸上競技、カヌー、バスケットボール、バレーボール、バドミントン、体操、水泳、柔道、剣道、レスリング）に対して質問紙調査を行った。それぞれの人数は、部員49名（男性：36名、女性：13名）、指導者40名（男性：33名、女性：7名）、保護者47名（男性：11名、女性：36名）であった。

2.2 調査内容

部員が運動部活動を通して得られる心理社会的スキルに関わる記述を広く収集した。具体的には、部員がスポーツ技術や体力の他にどのようなことを得たり学んだりしていると考えているのかを、いくつでも自由に記載するよう求めた。

2.3 調査時期

2010年7月下旬から8月上旬に実施した。

2.4 調査手続き

調査依頼の後、受諾済みの運動部の指導者に質問紙を送付した。部員と保護者に対しては、3校

の指導者を介して部員とその保護者に質問紙を配布した。指導者に対しては、5校に勤務する指導者各1名を介して同じ高等学校に勤務する他の運動部の指導者に質問紙を配布した。回答後の質問紙は、配布の仲介を請け負った指導者にとりまとめを依頼して回収した。また、調査は第1著者が所属する研究機関にある倫理委員会の承認を得て実施し、調査対象者には文書により研究目的、方法、データの取り扱い、プライバシーの保護等の説明を行い、回答の承諾を得た。

2.5 分析

最初に、調査対象者から得られた自由記述を必要に応じて1つの文章が単一の意味内容を示すように区切った。つづいて、調査内容とは無関係と思われる記述をデータから削除した。データ削除の基準は、部員が運動部活動を通して得られる心理社会的スキルとは異なる記述とした。例えば、保護者による指導者への感謝の言葉や、指導者による指導行動などの記述は削除対象となった。なお、この手続きは5名の大学教員の合議により行われた。このようにして得られたデータはKJ法(川喜多, 1967)におけるグループ化の作業を援用して類似の内容に分類され、それらを単位とする下位グループが構成された。さらに、下位グループを類似の内容にまとめ上位グループを構成した。最終的に、上位グループに含まれる項目数が均等になるよう調整するとともに、文章に統一性を持たせるよう項目表現を修正した。なお、下位グループの構成は大学教員2名が、上位グループの構成と最終的な項目数の調整や項目表現の修正は大学教員5名が合議に基づき行った。これらの大学教員はいずれもスポーツ心理学を専門とする博士学位保有者であった。

3. 結果と考察

調査対象者から得られた自由記述から、最終的に運動部活動における心理社会的スキルに関わる481個の記述データが得られた。調査対象者の属性毎に分析したところ、部員では33個の下位グループが、指導者では36個の下位グループが、

そして、保護者では28個の下位グループが抽出された。これらの下位グループをさらに類似した内容でまとめると、部員、指導者、保護者に共通してみられる9個の上位グループが導かれた。それらは、「忍耐力」「集中力」「思考力」「ストレスマネジメント」「協調性」「コミュニケーション」「挨拶礼儀」「感謝の気持ち」「自己効力感」と解釈される内容であった(表1)。そして、これら9個の上位グループ毎に該当する項目内容を吟味し、包括的な項目構成を考慮することで3項目ずつを選定して尺度項目の候補とした。なお、グループ毎の項目数を3とした理由は、尺度の信頼性を保ちつつも項目数をできる限り少なくすることを意図したためである。すなわち、調査2では、運動部活動と日常生活の2つの場面を想定して心理社会的スキル尺度への回答が求められる。そのうえ、縦断調査であることから、同一の調査対象者に対して3カ月程度の間隔を空けて3回の調査が実施される。したがって、回答者が回答に要する負担をできる限り軽減する必要があった。このような手続きを経て、合計27項目を運動部活動における心理社会的スキル尺度を構成する項目群として選定した(表2)。

9グループの内容を島本ほか(2013)の大学生アスリート用のライフスキル尺度と照らし合わせると、類似の内容が多く認められた(「ストレスマネジメント」「思考力」「協調性」「コミュニケーション」「挨拶礼儀」「感謝の気持ち」)。また、本研究において独自に構成された「忍耐力」「集中力」「自己効力感」は、スポーツ活動に特有の目標達成において必要とされる心理社会的スキルといえる。さらに、本研究における9個の上位グループのうち、「協調性」「コミュニケーション」「挨拶礼儀」「感謝の気持ち」は社会的なスキルに関する内容であり、「忍耐力」「集中力」「思考力」「ストレスマネジメント」「自己効力感」は個人的なスキルに関する内容であると考えられる。この点について、上野・中込(1998)は運動部活動への参加による高校生のライフスキルを「個人的スキル」と「対人スキル」の両側面から捉えていることから、本研究においても同様の捉え方ができ

表1 運動部活動における心理社会的スキルの分類と記述例

上位グループ	下位グループ	記述数			記述例
		部員	指導者	保護者	
忍耐力	努力	3	5	7	上手になったりするために必死に打ち込むこと
	精神力	21	4	2	つらい練習をたえたことで精神的にきたえられた
	諦めないこと	6		2	最後まであきらめないことの大切さ
	我慢	2		2	我慢すること
	忍耐力		11	11	苦しいことも我慢する忍耐力
集中力	やり遂げること		3		周囲と協力し、物事をやり遂げようとする力
	集中力	3	3	5	大事な時の集中力がついた
思考力	思考力		2	3	多角的なモノの見方、考え方
	想像力		2		想像力が身についた
	落ち着いた行動	3			ものごとを考えてから行動できるようになった
	判断力			2	良い悪いの判断がきちんとできるようになった
ストレス マネジメント	リラクセーション	3			リラクセスの仕方を学んだ
	気持ちのコントロール	3		5	ポジティブに切り替えるようになってきたと思います
協調性	協調性	2	11	3	周りと協調して生活する
	協力	6	5	4	周りの仲間と協力することの大切さ
	集団行動	8	8	4	集団の中での自分の役割を考えて、他の人と協力して仕事をする
	責任感	1	4	1	自らの仕事、役割に責任を持ち成し遂げようとする力
	思いやり	5	9	7	人に対して優しい気持ちを持てるようになった
	チームワーク	5	1		苦しい練習に耐え抜く忍耐力や厳しい練習でチームワークを得ました
	リーダーシップ	2			人に指示を出したり人をまとめたりすることに慣れた
	社会性		6		社会性、集団の中の一員としての自己の役割を認識できる
	所属意識		1		部に所属することで、集団の一員としての安心感がある
	コミュニケーション	5	7	3	他人とのコミュニケーション能力の育成
挨拶礼儀	挨拶	11	5	19	技術以外の挨拶や返事などの生活での必要な知識
	礼儀	13	13	9	礼儀とか年上の人に対する態度
	上下関係	9	8	10	先輩との上下関係などで人との関わり方を学ぶことが出来る
	言葉づかい 気遣い	5	3	3	場の空気にあった言葉づかいや対応能力
感謝の 気持ち			2	2	周囲に気を配ること
	仲間の大切さ	21	5	12	仲間が常に自分自身の支えになっていること
	他者への感謝	7	9	5	周りの人に感謝の気持ちを持てるようになった
自己効力感	道具への感謝	3	3		自分で使う道具の大切さ、物を大事にすること
	自信	1	2		苦しい練習を乗り越えて、自分に自信がついたりした
	達成感	4	2		目標や不可能だったことを可能にできたときの達成感を味わった
	積極性	3	3		練習はやらされるのではなく「自分でやるんだ」という積極性
その他	向上心		2	3	失敗から学ぶ向上心
		16	15	32	

† 記述データ数の合計は、部員 171、指導者 154、保護者 156 であった

†† 下位グループ数の合計は、部員 33、指導者 36、保護者 28 であった

表2 運動部活動における心理社会的スキルを表す項目群

グループ	番号	記述
忍耐力	1.	難しいことにも、ねばり強く取り組める。
	14.	困難なことにも、あきらめずにやり遂げられる。
	23.	苦しく、辛いことでも、耐えられる。
集中力	2.	やるべきことに集中して取り組める。
	10.	気持ちをゆるめずに、与えられた課題に没頭できる。
	24.	やると決めたことに、夢中になって取り組める。
思考力	3.	物事をいろいろな角度から捉えたり、考えたりすることができる。
	16.	冷静な目で物事をみたり、考えたりすることができる。
	27.	問題を解決するとき、いろいろなやり方を考えることができる。
ストレス マネジメント	4.	イヤなことや困ったことがあっても、落ち着いていられる。
	12.	イヤなことや困ったことがあったときに、自分なりに解決できる。
	19.	もやもやした気持ちをリフレッシュできる。
協調性	5.	周囲の人と協力して活動できる。
	18.	周囲をみながら、歩調を合わせて行動できる。
	25.	自分勝手にならず、皆と一緒に行動する。
コミュニケーション	6.	相手の立場を考えながら会話できる。
	13.	自分の考えや気持ちを他の人にうまく伝えられる。
	22.	相手の話をよく聞いて、自分の意見を伝えられる。
挨拶礼儀	7.	挨拶や返事をきちんとすることができる。
	11.	相手にふさわしいような、正しい言葉づかいができる。
	26.	目上の人に対して、礼儀正しい態度で接することができる。
感謝の気持ち	8.	周囲の人に感謝の気持ちを持つことができる。
	17.	人や物を大切にすることを持つことができる。
	20.	感謝の言葉を素直に言うことができる。
自己効力感	9.	私はやればできる人間だと思う。
	15.	いろいろなことに自信を持って取り組める。
	21.	たいていのことは、うまく行うことができると思う。

たといえる。

10 種目、25 団体（個人種目 3 団体、球技系種目 10 団体、ラケット系種目 6 団体、格闘技系種目 4 団体、表現系種目 2 団体）であった。

III 調査 1

1. 目的

運動部活動における心理社会的スキルを測定する尺度と日常生活における心理社会的スキルを測定する尺度を作成することを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象者

N 県の公立高等学校 11 校の部員 2, 3 年生 422 名のうち、有効回答者 376 名（2 年生男子 121 名、女子 45 名；3 年生男子 144 名、女子 66 名、有効回答率 89.1%）を分析対象とした。対象運動部は

2.2 調査内容

（1）運動部活動における心理社会的スキル 予備調査によって得られた「忍耐力」「集中力」「思考力」「ストレスマネジメント」「協調性」「コミュニケーション」「挨拶礼儀」「感謝の気持ち」「自己効力感」の 9 要因毎に 3 項目、全 27 項目を調査に用いた（表 2）。回答は、各項目が示す内容を「現在行っている運動部活動の中で」どの程度うまくできると思うかを「全くあてはまらない（1）」から「よくあてはまる（5）」までの 5 件法で求めた。

(2) 日常生活における心理社会的スキル 運動部活動における心理社会的スキル尺度と同じ 27 項目を調査に用いた。ただし、教示文は「現在行っている運動部活動の中で」の部分を「現在の日常生活の中で」に差し替え、各項目が示す内容をどの程度うまくできると思うかを「全くあてはまらない (1)」から「よくあてはまる (5)」までの 5 件法で回答を求めた^{注4)}。

2.3 調査時期

2011 年 3 月上旬に実施した。

2.4 調査手続き

調査依頼の後、受諾済みの運動部の指導者に質問紙を送付した。指導者を介して部員に質問紙を配布し、無記名方式で調査を実施した。回答後の質問紙は、指導者にとりまとめを依頼して回収した。なお、予備調査と同様に研究倫理上の手続きを経て調査を実施した。

2.5 分析

想定された 9 下位尺度について検証的因子分析を行うことにより構成概念妥当性を検証した。モデルの適合度指標には GFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index), CFI (Comparative Fit Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を用いた。なお、モデル採択においては、朝野ほか (2005), 山本・小野寺 (2000) を参考にして、GFI, AGFI, CFI については .90 以上を、RMSEA については .08 以下をそれぞれ基準値として設定した。その際、豊田 (2003)^{注5)} に従い、各適合度指標を総体的に判断してモデルの評価を行った。加えて、尺度の内容的妥当性を検討した。また、尺度の信頼性は内的整合性を検討した。

3. 結果と考察

3.1 運動部活動における心理社会的スキル尺度

3.1.1 尺度の作成と妥当性の検討

運動部活動における心理社会的スキル尺度として想定された 9 下位尺度に対して検証的因子分

析を行った。全 27 項目で分析した結果、モデルの適合度指標は GFI が .88, AGFI が .83, CFI が .91, RMSEA が .07 となった (図 1, 表 3)。これらのうち、CFI と RMSEA は基準値を満たしていた。また、GFI は基準値を満たしていなかったが基準値に近い値であり、AGFI は GFI から著しく値が低下することはなかった。さらに、潜在変数から各観測変数へのパス係数は 9 下位尺度とも .53 以上であった (いずれも $p < .001$)。このように、9 下位尺度 27 項目による運動部活動における心理社会的スキル尺度が作成された。また、9 因子モデルのデータに対する適合度は総体的にみて妥当な範囲にあり、各因子とそれを構成する項目間の対応も適当であると考えられた。このようなこ

GFI = .88, AGFI = .83, CFI = .91, RMSEA = .07

† 観測変数の数値は項目番号である

†† 外生変数間のパス係数は表 3 に示した

††† 誤差変数の記載は省略した

†††† パス係数の値はいずれも、 $p < .001$ である

††††† $N = 376$

図 1 運動部活動における心理社会的スキル尺度の検証的因子分析結果と α 係数

表3 各尺度の潜在変数間の相関係数

下位尺度	忍耐力	集中力	思考力	ストレス マネジメント	協調性	コミュニケーション	挨拶 礼儀	感謝の 気持ち	自己 効力感
忍耐力	-	.99	.65	.73	.72	.82	.76	.79	.75
集中力	.96	-	.75	.77	.80	.86	.80	.86	.80
思考力	.69	.66	-	.91	.60	.88	.56	.52	.82
ストレスマネジメント	.76	.70	.83	-	.70	.93	.62	.61	.82
協調性	.64	.68	.63	.62	-	.90	.80	.82	.61
コミュニケーション	.79	.76	.74	.83	.79	-	.82	.85	.84
挨拶礼儀	.64	.68	.48	.51	.70	.71	-	.92	.58
感謝の気持ち	.70	.69	.50	.57	.80	.77	.87	-	.52
自己効力感	.80	.71	.80	.78	.57	.78	.49	.49	-

† 上段：運動部活動における心理社会的スキル尺度。下段：日常生活における心理社会的スキル尺度

†† N=376

とから、運動部活動における心理社会的スキル尺度の構成概念妥当性は認められると考えられた。

また、本尺度の項目群は、「運動部活動でスポーツ技術や体力の他に、どのようなことを得たり学んだりしてきたと思いますか」との教示文の下、運動部活動の参加者（部員）とそれを取り巻く大人（指導者、保護者）の視点に基づいて収集されたものであった。項目の採択や表現の修正にあたっては、それが「部員が運動部活動を通して得られる心理社会的スキル」を表す内容であることが、スポーツ心理学を専門とする5名の大学教員によって慎重に検討されたうえで行われたものであった。このようなことから、本尺度の内容的妥当性は認められると考えられた。

作成された9下位尺度は、それぞれ以下の内容を表すものと解釈された。「忍耐力」は、困難な状況に直面しても粘り強く物事に取り組めることを表す内容であった。「集中力」は、やるべきことに集中して取り組めることを表す内容であった。「思考力」は、物事を様々な角度から見たり考えたりできることを表す内容であった。「ストレスマネジメント」は、ストレスに直面した際に自分なりの方法で気持ちを落ち着かせたり問題を解決したりできることを表す内容であった。「協調性」は、周囲の人々と協調して行動できることを表す内容であった。「コミュニケーション」は、相手の立場をよく理解して話をしたり聞いたりできることを表す内容であった。「挨拶礼儀」は、相手に応じて礼儀正しく挨拶や返事ができること

を表す内容であった。「感謝の気持ち」は、周囲の人や物に対して感謝の気持ちや大切にすることを表す内容であった。そして、「自己効力感」は、様々なことに対して自信を持って取り組めることを表す内容であった。

3.1.2 信頼性の検討

運動部活動における心理社会的スキル尺度の各下位尺度に対応する項目群の α 係数（信頼性係数）を求めた。その結果、「忍耐力」が.82,「集中力」が.74,「思考力」が.77,「ストレスマネジメント」が.65,「協調性」が.79,「コミュニケーション」が.65,「挨拶礼儀」が.77,「感謝の気持ち」が.79,「自己効力感」が.66であった。これらのうち、「ストレスマネジメント」「コミュニケーション」「自己効力感」で α 係数は.70を下回ったが、それ以外の下位尺度では.74から.82の範囲であった。下位尺度を構成する項目数が少ないことを踏まえると、各下位尺度は概ね一貫性の高い項目で構成されていると考えることができる。このように、尺度の信頼性を確保するうえで課題はあるものの、運動部活動における心理社会的スキル尺度の内的整合性は概ね認められると考えられた。

3.2 日常生活における心理社会的スキル尺度

3.2.1 尺度の作成と妥当性の検討

運動部活動における心理社会的スキル尺度と同一項目で構成される、日常生活における心理社会的スキル尺度について分析を行った。具体的には、全27項目で9下位尺度を想定して検証的因

子分析を行った。その結果、モデルの適合度指標は GFI が .87, AGFI が .82, CFI が .91, RMSEA が .07 となった (図 2, 表 3)。これらのうち, CFI と RMSEA は基準値を満たしていた。また, GFI は基準値を満たしていなかったが基準値に近い値であり, AGFI は GFI から著しく値が低下することはない。また, 潜在変数から各観測変数へのパス係数は 9 下位尺度とも .53 以上であった (いずれも $p < .001$)。このように, 9 下位尺度 27 項目による日常生活における心理社会的スキル尺度が作成された。また, 9 因子モデルのデータに対する適合度は総体的にみて妥当な範囲であり, 各因子とそれを構成する項目間の対応も適当であることが示された。このことから, 日常生活における

心理社会的スキル尺度の構成概念妥当性は認められると考えられた。

3.2.2 信頼性の検討

日常生活における心理社会的スキル尺度の各下位尺度に対応する項目群の α 係数 (信頼性係数) を求めた。その結果, 「忍耐力」が .82, 「集中力」が .78, 「思考力」が .82, 「ストレスマネジメント」が .70, 「協調性」が .82, 「コミュニケーション」が .70, 「挨拶礼儀」が .81, 「感謝の気持ち」が .82, 「自己効力感」が .75 であった。このように, 全ての下位尺度で α 係数は .70 から .82 の範囲で信頼性係数の値は十分に高い水準にあり, 各下位尺度は概ね一貫性の高い項目で構成されていることが示された。したがって, 日常生活における心理社会的スキル尺度の内的整合性は認められると考えられた。

IV 調査 2

1. 目的

調査 1 で作成された 2 つの尺度を用いて同一の対象者に 3 カ月程度のインターバルを空けた 3 回の調査を実施した。そこで得られたデータを基にして, 運動部活動と日常生活における心理社会的スキルの因果関係を交差遅れ効果モデルを用いて検討した。

2. 方法

2.1 調査対象者

調査 1 とは異なる N 県の公立高等学校 3 校の部員 1 年生 246 名を対象として, 3 回の質問紙調査を実施した。これら全ての調査に有効回答した 137 名 (男子 73 名, 女子 64 名, 有効回答率 55.7%) を分析対象者とした^{注 6)}。対象運動部は 12 種目, 23 団体 (個人種目 3 団体, 球技系種目 9 団体, ラケット系種目 7 団体, 格闘技系種目 3 団体, 表現系種目 1 団体) であった。

2.2 調査内容

(1) 運動部活動における心理社会的スキル 調査 1 で作成された運動部活動における心理社会的

GFI = .87, AGFI = .82, CFI = .91, RMSEA = .07

† 観測変数の数値は項目番号である

†† 外生変数間のパス係数は表 3 に示した

††† 誤差変数の記載は省略した

†††† パス係数の値はいずれも, $p < .001$ である

††††† $N=376$

図 2 日常生活における心理社会的スキル尺度の検証的因子分析結果と α 係数

スキル尺度を調査に用いた。この尺度は9下位尺度で構成され、項目数は27であった。回答は、各項目が示す内容を「現在行っている運動部活動の中で」どの程度うまくできると思うかを「全くあてはまらない(1)」から「よくあてはまる(5)」までの5件法で求めた。

(2) 日常生活における心理社会的スキル 調査1で作成された日常生活における心理社会的スキル尺度を調査に用いた。この尺度は、運動部活動における心理社会的スキル尺度と同様の項目構成であった。回答は、各項目が示す内容を「現在の日常生活の中で」どの程度うまくできると思うかを「全くあてはまらない(1)」から「よくあてはまる(5)」までの5件法で求めた。

2.3 調査時期

1回目の調査(1時点目)は2011年7月に、2回目の調査(2時点目)は同年10月に、3回目の調査(3時点目)は同年12月に実施した。調査間隔を3カ月程度とした理由は、大学運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係をパネル調査によって検討した島本・石井(2010)の研究を参考にした。そこでは、3カ月のインターバルは探索的に設定されたものであったが、因果関係を推定するうえで概ね妥当な範囲であったことが報告されている。本研究でもこれにならない、1時点目と2時点目のインターバルは3カ月とした。しかし、2時点目と3時点目のインターバルは高校生の冬休みの時期と重なること

から、それよりは若干短い期間となった。

2.4 調査手続き

調査依頼の後、受諾済みの学校長に質問紙を送付した。調査は学級担任の指示により、ホームルームの時間に無記名方式で一斉に実施された^{注7)}。回答後の質問紙は、各学級担任がホームルーム分をとりまとめ、それらを学校長に返送してもらうことによって回収した。なお、予備調査、調査1と同様に研究倫理上の手続きを経て調査を実施した。

2.5 分析

構造方程式モデリング(Structural equation modeling)を用いて3波のパネルデータモデルを分析した。分析モデルとしては図3の交差遅れ効果モデルを用いた。この分析モデルにおいて、「運動部活動における心理社会的スキル」から「日常生活における心理社会的スキル」へのパス(図3のa, c)からは、「運動部活動における心理社会的スキルが日常生活でも適用されるようになる」という因果関係が推定される。また、「日常生活における心理社会的スキル」から「運動部活動における心理社会的スキル」へのパス(図3のb, d)からは、「日常生活における心理社会的スキルが運動部活動でも適用されるようになる」という因果関係が推定される。つまり、これらのパス係数が有意な正の値を示す時にはそれらの間に般化が認められると解釈される。なお、分析は島本・

図3 本研究で使用した交差遅れ効果モデル

石井（2010）にならい、モデルの一部に等値制約（Equality constraints）を設けた。具体的には1時点目と2時点目の間、そして2時点目と3時点目の間における変数間の対応するパス（4カ所）、および2時点目と3時点目における誤差共分散（2カ所）に制約を設けた。また、9つの心理社会的スキル毎に分析は行われた。その際、運動部活動における心理社会的スキル尺度と日常生活における心理社会的スキル尺度は同一内容の下位尺度を対応させた。モデルの適合度指標にはGFI, AGFI, CFI, RMSEAを用い、モデル採択においては調査1と同様、GFI, AGFI, CFIについては.90以上を、RMSEAについては.08以下をそれぞれ基準値として設定した。なお、豊田（2003）に従い、各適合度指標を総体的に判断してモデルの

評価を行った。

3. 結果と考察

3.1 3時点における各尺度の記述統計量

運動部活動における心理社会的スキル尺度と日常生活における心理社会的スキル尺度の3時点の平均値（表4）、および対応する下位尺度間の相関係数（表5）を示した。平均値の範囲は全ての下位尺度で5点—15点の範囲である。下位尺度間の平均値を概観すると比較的高い値を示したのが「挨拶礼儀」「感謝の気持ち」であり、他の下位尺度が一貫して11点台を示している中、運動部活動と日常生活の両場面で3時点とも12点台を示していた。その一方で、比較的低い値を示したのは「自己効力感」であり、運動部活動と日常

表4 3時点における各心理社会的スキル尺度の平均値

下位尺度	運動部活動			日常生活		
	1時点目	2時点目	3時点目	1時点目	2時点目	3時点目
忍耐力	11.90 (2.28)	11.69 (2.40)	11.38 (2.60)	11.50 (2.42)	11.10 (2.44)	11.24 (2.34)
集中力	12.12 (2.16)	11.67 (2.21)	11.37 (2.35)	11.74 (2.07)	11.43 (2.21)	11.28 (2.29)
思考力	11.33 (2.12)	11.09 (2.33)	11.03 (2.33)	11.11 (2.35)	11.05 (2.34)	11.11 (2.25)
ストレスマネジメント	11.37 (2.14)	10.83 (2.34)	10.93 (2.37)	11.22 (2.26)	10.86 (2.33)	11.05 (2.38)
協調性	12.36 (2.14)	12.09 (2.25)	11.88 (2.24)	12.16 (2.20)	11.92 (2.26)	11.77 (2.26)
コミュニケーション	11.36 (2.25)	10.93 (2.26)	10.98 (2.35)	11.47 (2.18)	11.16 (2.28)	11.27 (2.13)
挨拶礼儀	12.56 (2.06)	12.46 (2.15)	12.39 (2.19)	12.50 (2.11)	12.56 (2.05)	12.31 (2.23)
感謝の気持ち	12.46 (2.16)	12.45 (2.07)	12.09 (2.24)	12.26 (2.14)	12.24 (2.26)	12.09 (2.12)
自己効力感	10.75 (2.13)	10.16 (2.42)	10.39 (2.22)	10.64 (2.41)	10.23 (2.52)	10.45 (2.21)

† カッコ内は標準偏差

†† N=137

表5 心理社会的スキル尺度間の相関係数

下位尺度	部活1					部活2				部活3			日常1		日常2
	部活2	部活3	日常1	日常2	日常3	部活3	日常1	日常2	日常3	日常1	日常2	日常3	日常2	日常3	日常3
忍耐力	.69	.41	.67	.58	.41	.59	.63	.71	.54	.45	.60	.83	.50	.50	.60
集中力	.70	.44	.60	.40	.34	.60	.61	.71	.54	.36	.56	.74	.40	.40	.59
思考力	.62	.41	.63	.60	.44	.60	.65	.82	.61	.45	.61	.82	.51	.51	.66
ストレスマネジメント	.50	.36	.48	.42	.30	.59	.50	.67	.60	.40	.60	.78	.40	.40	.58
協調性	.71	.51	.63	.67	.49	.71	.63	.79	.68	.48	.62	.76	.49	.49	.63
コミュニケーション	.58	.45	.59	.57	.38	.68	.52	.77	.61	.46	.57	.79	.47	.47	.56
挨拶礼儀	.62	.51	.66	.66	.52	.64	.56	.75	.65	.53	.60	.80	.51	.51	.62
感謝の気持ち	.70	.44	.62	.68	.48	.64	.65	.84	.63	.40	.55	.80	.46	.46	.61
自己効力感	.59	.45	.60	.51	.45	.65	.59	.79	.54	.46	.59	.74	.53	.53	.56

† 部活：運動部活動における心理社会的スキル尺度，日常：日常生活における心理社会的スキル尺度

†† 項目名の数字は調査時期（時点）を表す

††† N=137

生活の両場面で3時点とも10点台を示していた。

3.2 モデル適合度

9つの心理社会的スキル毎に交差遅れ効果モデルの適合度を検討した(表6)。その結果、「集中力」「コミュニケーション」「自己効力感」を除く6つの心理社会的スキルにおいて、各適合度指標の値はGFIが.99, AGFIが.93—99, CFIが1.00, RMSEAが.00—.06であり、十分に高いものであった。「集中力」「コミュニケーション」「自己効力感」についてはRMSEAの値が.08を上回った(集中力.10, コミュニケーション.12, 自己効力感.11)。ただし、GFIとCFIの値は.90以上の十分に高い値を示しており、AGFIはGFIから著しく値が低下することはなかった。このことについて、星野ほか(2005)によれば、小標本(250以下)ではRMSEAは高くなりすぎることが指摘されている。本調査のサンプルサイズが137であることに鑑みれば、本研究で設定した交差遅れ効果モデルのデータ適合度は総体的にみて妥当な範囲にあると考えられる。このようなことから、以下では9つの心理社会的スキルについて運動部活動場面と日常生活場面との因果関係について検討していく。

3.3 変数間の因果関係

3.3.1 運動部活動から日常生活への一方向的関係

最初に、運動部活動から日常生活へのパス係数

(a, c)をみると、全ての心理社会的スキルで有意な値を示した(表6)。これらの心理社会的スキルについては「運動部活動→日常生活」という因果関係が推定できる。すなわち、「忍耐力」「集中力」「思考力」「ストレスマネジメント」「協調性」「コミュニケーション」「挨拶礼儀」「感謝の気持ち」「自己効力感」については、「運動部活動における心理社会的スキルが日常生活でも適用されるようになる」という方向の般化があることが示唆された。このことについて、運動部活動では記録や競技力の向上を目指して日々の活動に取り組むことが多いといえるが、そのような中で部員は、粘り強く、集中して物事に取り組むと考えられる。そして、結果として成し遂げた成功の体験は部員の大きな自信となるであろう。また、運動部活動で生じる様々な問題や課題、あるいは苛立ち事に対して、適切な対処方法を考えたり、実行したりすることも考えられる。さらに、集団で目標達成に向けた練習を効果的に行う過程で、礼儀正しく振る舞うことや、仲間とコミュニケーションをとったり協力したりすることも要求される。本研究結果からは、このような運動部活動における心理社会的スキルが日常生活でも適用されるようになることが示唆されたといえる。

つづいて、パス係数が.40以上の心理社会的スキルをみると、それらは「協調性」「コミュニケーション」「挨拶礼儀」「感謝の気持ち」であった。これらはいずれも効果的な対人関係を形成

表6 モデルの適合度指標および運動部活動場面と日常生活場面における心理社会的スキルの因果関係

下位尺度	適合度指標				1 時点目→2 時点目		2 時点目→3 時点目	
	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	部活→日常(a)	日常→部活(b)	部活→日常(c)	日常→部活(d)
忍耐力	.99	.94	1.00	.04	.16	.26 **	.22 *	.37 ***
集中力	.98	.89	.99	.10	.10	.21 *	.24 *	.28 **
思考力	.99	.95	1.00	.00	.24 *	.43 ***	.20	.35 **
ストレスマネジメント	.99	.93	1.00	.05	.12	.28 *	.39 ***	.38 ***
協調性	1.00	.98	1.00	.00	.47 ***	.16	.49 ***	.14
コミュニケーション	.97	.86	.99	.12	.25 *	.14	.46 ***	.11
挨拶礼儀	.99	.93	1.00	.06	.36 **	.09	.41 ***	.26 **
感謝の気持ち	1.00	.99	1.00	.00	.56 ***	.19	.40 ***	.07
自己効力感	.98	.87	.99	.11	.10	.31 **	.25 *	.20

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

†† N=137

するうえで求められる社会的スキルと解釈できる内容である。さらに、これらの心理社会的スキルは1時点目から2時点目(a)、2時点目から3時点目(c)のいずれにおいてもパス係数は有意であった。これらのことから、運動部活動から日常生活への般化は特に社会的スキルにおいて生じやすく、また、時期に関わらず安定的にみられることが推察される。

一般に、般化は類似度が高い状況で生じやすく、周囲からフィードバックを受けることも重要であるといわれている(藤枝, 2011; 蓑内, 1993; 岡村ほか, 2009; 渡辺・星, 2009)。実際に、学校生活や家庭生活では運動部活動と同様に数々の心理社会的スキルを使用する状況は多くある。そして、心理社会的スキルを用いた際には、学校では担任教師等の教員が、家庭では両親等の家族がフィードバックを与える環境もある。このような条件が整うことで、運動部活動の心理社会的スキルは日常生活に般化したものと推察される。また、運動部活動はスポーツに興味と関心を持つ同好の生徒が顧問教諭の指導を受けながら行うものである(文部省, 1999)。そのような中で、運動部の規範に関わる指導は学校生活や家庭生活への適用を踏まえて行われることも多いと思われる。そうした指導の影響として、部員の社会的スキルは安定的な般化がもたらされたことが予想される。

3.3.2 日常生活から運動部活動への一方向的関係

日常生活から運動部活動へのパス係数(b, d)をみてみると、「協調性」「コミュニケーション」「感謝の気持ち」を除く心理社会的スキルで有意な値を示した(表6)。これらの心理社会的スキルについては「日常生活→運動部活動」という因果関係が推定できる。すなわち、「忍耐力」「集中力」「思考力」「ストレスマネジメント」「挨拶礼儀」「自己効力感」については、「日常生活における心理社会的スキルが運動部活動でも適用されるようになる」という方向の般化があることが示唆された。また、パス係数が比較的高かった(.35以上)心理社会的スキルをみてみると、それらは個人的スキルに関する内容と解釈される「忍耐力」「思考力」「ストレスマネジメント」であった。さらに、

これらは1時点目から2時点目(b)、2時点目から3時点目(d)のいずれにおいてもパス係数は有意であることが示された。これらのことから、日常生活から運動部活動への般化は特に個人的スキルにおいて生じやすく、また、時期に関わらず安定的にみられることが推察される。一方、社会的スキルについては唯一、「挨拶礼儀」において有意であったが、その他の社会的スキル(「協調性」「コミュニケーション」「感謝の気持ち」)については日常生活場面から運動部活動場面への般化は起こりにくいことが推察される。

このことについて、部員が心理社会的スキルを使用する場面は運動部活動だけではない。むしろ、学校や家庭では心理社会的スキルに関わる内容は教育上の課題、あるいは目標やしつけとして位置づけられ、積極的に使用することが期待されている。すなわち、学校では集中して授業に取り組むことや忍耐強く継続的に学習に取り組むことが奨励され、家庭では毎日の挨拶がしつけの一部として行われていると考えられる。本研究結果から、そのような日常生活で使用された心理社会的スキルは、運動部活動でも適用されるということが示唆されたといえる。これにも運動部活動から日常生活への般化と同様に、両場面間には心理社会的スキルを使用する状況に類似性があることや、周囲からのフィードバックを受けられる環境があるということが般化に影響したものと推察される。また、日常生活場面から運動部活動場面への般化は特に個人的スキルについて生じやすいことが示された。これは、社会的スキルについて生じやすいとされる運動部活動場面から日常生活場面への般化とは対照的な結果であった。このことについて、学校生活や家庭生活では、集団活動よりもむしろ教科学習や受験勉強に個人で取り組むことが多いといえる。そして、そのことに対する周囲からのフィードバックがあり、個人的スキルの安定的な般化がもたらされたものと推察される。

3.3.3 運動部活動と日常生活との循環的關係

1時点目の運動部活動から2時点目の日常生活へのパス係数(a)、および、2時点目の日常生活から3時点目の運動部活動へのパス係数(d)の

どちらにも有意な値を示した心理社会的スキルは、「思考力」「挨拶礼儀」であった(表6)。これらの心理社会的スキルについては「運動部活動→日常生活→運動部活動」という因果関係が推定され、「運動部活動における心理社会的スキルが日常生活でも適用されるようになり、そしてそのことがさらに運動部活動でも適用されるようになる」という循環的な般化があることが示唆された。また、これとは逆方向の循環的な因果関係も見出された。すなわち、1時点目の日常生活から2時点目の運動部活動へのパス係数(b)、および、2時点目の運動部活動から3時点目の日常生活へのパス係数(c)のどちらにも有意な値を示した心理社会的スキルは、「忍耐力」「集中力」「ストレスマネジメント」「自己効力感」であった。これらの心理社会的スキルについては「日常生活→運動部活動→日常生活」という因果関係が推定され、「日常生活における心理社会的スキルが運動部活動でも適用されるようになり、そしてそのことがさらに日常生活でも適用されるようになる」という循環的な般化があることが考えられた。これらのことから、心理社会的スキルの使用の起点は異なるものの、その般化は循環的に生じることが示唆されたといえる。このことに関して、佐藤(2004)は体験的に獲得される社会性の育成は、学校やそれ以外の生活がかみ合うことで効果的に実現し得ることを指摘している。すなわち、個人の心理社会的な成長は学校や家庭、あるいは異年齢集団による活動など、様々な場面や状況に適応する過程で徐々に育まれるものと考えられる。運動部活動を行う部員は、心理社会的スキルの般化が運動部活動と日常生活の両場面間で繰り返し行われることにより、その適用可能性を高めていることが推察される。

V 総合的考察

本研究の目的は、運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化について検討することであった。そのため、運動部活動と日常生活の各場面における心理社会的スキルを測定する尺度

を作成し、両場面間の心理社会的スキルの因果関係を交差遅れ効果モデルを用いて検討した。その結果、運動部活動における心理社会的スキルは日常生活へ般化するということが示唆された。また、それとは逆の方向性、すなわち「日常生活における心理社会的スキルが運動部活動でも適用されるようになる」という方向の般化があることも示唆された。さらに、運動部活動と日常生活の各場面における心理社会的スキルの間には循環的な因果関係があることも示唆された。以下では、本研究の意義の観点から総合的考察を行うとともに、今後の研究課題を述べる。

本研究の意義の1つ目は、運動部活動の意義の明確化に向けた貢献であった。運動部活動には部員の豊かな人間性や社会性の育成に寄与することが期待されている。すなわち、運動部活動における心理社会的スキルはその場面に限定されることなく、広く日常生活にまで及ぶことによってその価値は認められるといえる。しかし、その波及の実態に関する実証的な検討はこれまで十分に行われてこなかった。本研究で運動部活動における心理社会的スキルは日常生活に般化することが示唆されたことによって、運動部活動における心理社会的スキルは場面限定的なものではなく日常生活にも波及する可能性があることが示唆されたといえる。具体的には、個々の部員が運動部活動で使用する忍耐力、集中力、思考力等の個人的なスキル、そして、協調性、コミュニケーション、挨拶礼儀等の社会的なスキルが、学校生活や家庭生活等でも適用されるということである。このことについて、教育現場では運動部活動の在り方に関する議論の中で、受験勉強との関わりや学業との両立について関心が持たれるが(ベネッセ教育総合研究所, 2009; 横浜市教育委員会, 2015), それらの中には「運動部活動は受験勉強の足かせになる」というような否定的な意見がある一方で、「運動部活動を経験してきた生徒は受験勉強でも粘り強さがある」とその有効性を評価する声もある。ベネッセ教育総合研究所(2009)によれば、高校生部員の77%が週6-7日間活動しており、1日あたりの活動時間が3時間以上である部員は39

%である。この報告からもわかるように、時間的負担の観点からは、多くを費やす運動部活動は受験勉強を阻害するものと評価されてもおかしくはない。実際にゆとりのない生活を部員に強いる運動部活動の在り方は社会問題にもなっている。しかし、受験勉強を目標達成の過程と捉えるならば、受験勉強と運動部活動との類似性は高く、運動部活動で使用する心理社会的スキルの受験勉強への般化は大いに期待できると考えられる。すなわち、運動部活動を経験した生徒は受験勉強でも周囲の仲間と協力し、お互いの立場や気持ちを理解しながら励まし合うことで効果的に学習に取り組めるようになり、その結果として目標達成に近づくという道筋を期待することができる。したがって、そのような過程を実証することができれば、運動部活動の教育に対する貢献は受験勉強の点からも指摘できるようになる。同様のことは学校行事や進路選択、それに家庭生活においても想定可能である。

2つ目の意義は、般化メカニズムの解明に向けた研究上の貢献であった。本研究では般化の生じやすさは心理社会的スキルの内容や時期によって異なることが考えられた。例えば、運動部活動から日常生活への般化は特に社会的スキルにおいて、日常生活から運動部活動への般化は特に個人的スキルにおいて、それぞれ時期に関わらず安定的に生じやすいことが推察された。これらのことから、今後は心理社会的スキルの般化場面を具体的に設定することにより、運動部活動で使用するどのような心理社会的スキルが、日常生活のどのような場面や状況で適用されるのかということ、時期も踏まえて個別に検討することが求められる。このことは、運動部活動における心理社会的スキルの般化過程を実証的に明らかにする試みともいえる。

3つ目の意義は、心理社会的スキルの般化を促進する効果的な指導方法の提案に向けた実践上の貢献であった。上述の通り、運動部活動から日常生活への般化は特に社会的スキルにおいて、日常生活から運動部活動への般化は特に個人的スキルにおいて生じやすいということであった。心理社

会的スキルの般化を促進する指導としては、このような特徴を理解したうえで適切なフィードバックを行うことが重要である。例えば、部員は運動部活動のチームメイトや顧問教諭との関係では、協調して行動したり、礼儀正しく接したりしてきた。同様のことを、クラスメイトや教職員、家族、地域住民等との関係においても積極的に行うことを奨励することは効果的である。また、学校や家庭で粘り強く物事に取り組み、考え方を工夫したりしてきたことが、運動部活動の練習を効果的に進めるうえで役立つことを部員に認識させることも有意義な試みである。このように、心理社会的スキルの般化を促進するためには、運動部活動はもとより日常生活における心理社会的スキルの使用も視野に入れた指導を行うことが望まれる。その一方で、指導上の優先課題を競技力の向上と考える指導者においては、心理社会的スキルの般化に向けた指導に関心を持ちにくいことも予想される。このことに対して、指導現場からは運動部活動と日常生活とを結びつけた指導を行うことによって、部員の自立心を育みながら高い競技成績を収めたという報告もある(畑, 2013)。そこでは、運動部活動で挨拶の意味や目的を理解させることで教室や家庭でも自然に挨拶ができるようになることや、身の回りの整理整頓と心身の整った精神状態とを結びつけ、パフォーマンス発揮に繋げることを試みている。このことから、心理社会的スキルの般化に向けた指導には、その適用範囲を様々な場所や環境に広げていくという意義に加えて、競技力の向上にも結びつくという効果も期待されよう。加えて、本研究では、運動部活動と日常生活における心理社会的スキルの間には循環的な因果関係があることも示唆された。このことから、運動部活動と日常生活の各場面における心理社会的スキルは、相互に般化を繰り返しながらその適用範囲を広めている可能性がうかがえる。既に述べてきたように、運動部活動を始めとした青少年スポーツの意義として人間形成への寄与が期待されてきたわけであるが、部員の心理社会的スキルは運動部活動と日常生活とを行き来しながら循環過程を経ることで、相乗的に養われていく過

程が実証的に見出されたともいえる。このことは、部員の人間形成を育む今後の運動部活動指導の道筋を提供するものである。

最後に、今後の課題について言及する。1点目は、心理社会的スキル尺度の妥当性と信頼性、およびモデルの妥当性の確保に向けた検討を行うことである。本研究では、尺度の妥当性については基準関連妥当性の検討が、信頼性については安定性の検討がそれぞれ不十分であった。また、モデルの妥当性については適合度指標が基準値を満たさないものもあった。今後は、異なる測定時期や調査対象者、サンプル等の条件によって検討を積み重ね、モデルの妥当性の確保とそれに基づく般化プロセスの理解を進めていくことが課題である。2点目は、般化に影響を及ぼす要因を検討することである。本研究では、運動部活動と日常生活との間で心理社会的スキルの般化が起きていることが示唆された。しかし、般化に影響を及ぼす要因を含めて調査を行ってこなかったため、個別の心理社会的スキル毎に般化が生じる理由を考察することは不十分であった。このことを受けて、今後は般化の影響要因を推定し、運動部活動における心理社会的スキルの般化プロセスを検討することが課題である。従来の研究では、課題の類似性やフィードバックを得ることが般化を促進することが指摘されてきたが（藤枝，2011；養内，1993；岡村ほか，2009；渡辺・星，2009），それらは教室における児童生徒の社会的スキルを対象とした研究から導かれた知見であり、運動部活動における心理社会的スキルについて検討したものではなかった。運動部活動はスポーツに興味と関心を持つ同好者が指導者の指導を受けながら自発的・自主的に行うという独自の文化、特徴を持った活動である（文部省，1999）。そこには、教室とは異なる運動部活動特有の般化影響要因があることが想定される。また、上野（2007）は心理社会的スキルの般化において、それが日常生活に般化可能であるとする「信念」の影響が大きいことを指摘している。このようなことから、般化プロセスの検討は運動部活動の環境的側面や部員の認知的側面を考慮に入れて行うことが求められる。

3点目は、運動部活動の場면을明確に定めようとして検討を行うことである。般化の検討においては、対象とする個々の場面設定を厳密に行うことが重要である。本研究では日常生活を、運動部活動を含まないものとして捉えることによって両者の区別を試みてきた。しかし、それが単に「時間」や「空間」によって区別できるものなのかということと判断は難しい。例えば、運動部活動は放課後や休日の数時間に行われることが一般的であるが、それ以外の時間帯でも運動部活動の指導者やチームメイトと関わる状況を想定することができる。また、帰宅後も自主練習や練習日誌の作成に時間を費やすことも予想される。運動部活動場面とそれ以外の場面との線引きをどのように行うのか、すなわち、心理社会的スキルの般化元や般化先の場면을明確に定義して研究を行うことの必要性が指摘される。

謝辞

本研究の実施にあたり、研究協力校の教諭および生徒の皆様に多大なご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

付記

本研究は、科学研究補助金・基盤研究(B)(No.22300207、研究代表者：西田保)の助成を受けて行われた。

注

注1) 杉山（2004）は、日常一般場面で用いられる心理的あるいは社会的スキルを「ライフスキル」、スポーツ場面で用いられる心理的あるいは社会的スキルを「心理社会的スキル」と呼び、両者を区別した。

注2) 運動部活動の心理社会的スキルの般化を検討するうえで、般化元と般化先の場면을区別する必要がある。そこで、本研究では特に断りのない限り「日常生活」を運動部活動以外の生活を示す用語として用いることとし、「運動部活動」を含まないものとして捉えることにする。

注3) 部員の活動種目は野球と陸上競技であった。野球は集団種目を陸上競技は個人種目をそれぞれ代表させた。

注4) 質問紙では、運動部活動の心理社会的スキルにつ

いては「現在行っている運動部活動の中で…」という教示文によって回答を求めた。一方、日常生活の心理社会的スキルについては「現在の日常生活の中で…」という教示文によって回答を求めた。このように、「運動部活動」と「日常生活」とを対に示すことで、回答者が両者を異なる場面であると識別して回答することを意図した。

注5) 豊田(2003)は、適合度指標には適合度のよさを判断するための明確な基準は存在しないことを指摘し、モデルの評価を行う場合には各適合度指標の特徴を理解し、これらを組み合わせて総体的にモデルのよさの判断を行うことが必要であるとしている。

注6) 有効回答率は55.7%であった。有効回答率が低くなった理由は、毎回の調査で欠席者や無効回答が一定程度存在したことによる。なお、3回の調査で1項目でも欠損値があるデータは削除対象となった。そのため、有効回答者は1回目調査が246名、2回目調査までが185名、3回目調査までが137名となった。

注7) 調査に参加した生徒の中には、運動部活動に参加していない者もいた。ただし、本研究では運動部活動に参加していない生徒のデータは分析に用いず、部員のデータのみを分析に使用した。また、縦断的調査において3時点のデータを個人レベルで対応させる必要があった。本研究は無記名方式で調査が実施されたが、所属運動部、性別、生年月日によって3時点データの対応づけを行った。

文 献

- 安藤玲子・坂本章・鈴木佳苗・小林久美子・木村文香(2004) インターネット使用が人生満足感と社会的効力感に及ぼす影響—情報系専門学校男子学生に対するパネル調査。パーソナリティ研究, 13 (1): 21-33.
- 安藤玲子・高比良美詠子・坂本章(2005) インターネットの使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響。パーソナリティ研究, 14 (1): 69-79.
- 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢(2005) 入門共分散構造分析の実践。講談社。
- Bakker, F. C. (1999) Psychological outcomes of physical education. In: Auweele, Y. V., Bakker, F., Biddle, S., Durand, M., and Seiler, R. (eds.) Psychology for physical educators. Human Kinetics, pp.69-71.
- ベネッセ教育総合研究所(2009) 第2回子ども生活実態基本調査報告書: 2009年。http://berd.benesse.jp/sho-touchutou/research/detail1.php?id=3333, (参照日 2017年5月5日)。
- Danish, S. J., Fornesis, T., Hodge, K., and Heke, I. (2004) Enhancing youth development through sport. World Leisure, 46(3): 38-49.
- Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D. (1993) Life development intervention for athletes: Life skills through sports. The Counseling Psychologist, 21: 352-385.
- Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D. (1995) Psychological interventions: A life development model. In: Murphy, S. M. (ed.) Sport psychology interventions. Human Kinetics, pp.19-38.
- Ewing, M. E., Gano-Overway, L. A., Branta, C. F., and Seefeldt V. D. (2002) The role of sports in youth development. In: Gatx, M., Messner, M. A., and Ball-Roleach, S. J. (eds.) Paradoxes of youth and sport. State University of New York Press, pp.31-47.
- Finkel, S. E. (1995) Causal analysis with panel data. Sage Publications, pp.22-44.
- 藤枝静暁(2011) 夏休みと冬休みにおける児童を対象とした家庭でのソーシャルスキル・トレーニングの実践研究。カウンセリング研究, 44: 313-322.
- Gould D. (2001) Goal setting for peak performance. In: J. M. Williams (ed.) Applied sport psychology: Personal growth to peak performance (4th ed.). Mayfield Publishing, pp.190-205.
- 畑喜美夫(2013) 子どもが自ら考えて行動する力を引き出す魔法のサッカーコーチング: ボトムアップ理論で自立心を養う。カンゼン。
- Hodge, K. and Danish, S. (1999) Promoting life skills for adolescent males through sport. In: Horne, A. M., and Kiselica, M. S. (eds.) Handbook of counseling boys and adolescent males: A practitioner's guide. Sage Publication, pp.55-71.
- 星野崇宏・岡田謙介・前田忠彦(2005) 構造方程式モデリングにおける適合度指標とモデル改善について: 展望とシミュレーション研究における新たな知見。行動計量学, 32 (2): 209-235.
- 猪俣公宏(2011) 発達の視点から見た青年・成人スポーツの現状と課題。杉原隆編, 生涯スポーツの心理学: 生涯発達の視点からみたスポーツの世界。福村出版, pp.174-180.
- 川喜多二郎(1967) 発想法—創造性開発のために—。中央公論社。
- 養内豊(1993) 課題の重要度の認知が自己効力の般化に及ぼす影響。教育心理学研究, 41(1): 57-63.
- 文部科学省(2009) 高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編。東山書房。
- 文部省(1999) みんなでつくる運動部活動—あなたの部に生かしてみませんか—。東洋館出版社。
- 日本体育協会指導者育成専門委員会(2007) 21世紀のスポーツ指導者: 望ましいスポーツ指導者とは。http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/publish/pdf/00.pdf, (参照日 2017年5月5日)。

- 西田保 (2004) 「スポーツ参加とライフスキル」研究の課題と展望. 日本スポーツ心理学会編, 最新スポーツ心理学: その軌跡と展望. 大修館書店, pp.79-86.
- 西野泰代・小林佐知子・北川朋子 (2009) 日常ストレスが抑うつ傾向に及ぼす影響と自己価値の役割についての縦断研究. パーソナリティ研究, 17 (2): 133-143.
- 岡村寿代・金山元春・佐藤正二・佐藤容子 (2009) 幼児の集団社会的スキル訓練—訓練前の特徴に焦点をあてた効果の検討—. 行動療法研究, 35 (3): 233-243.
- Papacharisis, V., Goudas, M., Danish, S. J., and Theodorakis, Y. (2005) The effectiveness of teaching a life skills program in a sport context. *Journal of Applied Sport Psychology*, 17, 247-254.
- 佐々木万丈・西田保・北村勝朗・磯貝浩久・渋谷崇行 (2013) 小学生および中学生のスポーツ活動による心理社会的効果とその日常生活への般化の実態. 日本女子体育大学紀要, 43: 139-152.
- 佐藤一子 (2004) いま学校で社会性は育てられるか: 地域社会・家庭とののかかわりの中で. 児童心理, 58(2): 22-27.
- Shields, D. L., Bredmeier, B. L., and Power F. C. (2002) Character development and children's sport. In: Smoll, F. L. and Smith R. E. (eds.) *Children and youth in sport: A biopsychological perspective* (2nd ed.). Kendall/Hunt Publishing, pp.537-559.
- 島本好平・石井源信 (2009) 体育授業におけるスポーツ経験がライフスキルの獲得に与える影響—運動部所属の有無からの検討—. スポーツ心理学研究, 36 (2): 127-136.
- 島本好平・石井源信 (2010) 運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係の推定. スポーツ心理学研究, 37 (2): 89-99.
- 島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信 (2013) アスリートに求められるライフスキルの評価—大学生アスリートを対象とした尺度開発—. スポーツ心理学研究, 40 (1): 13-30.
- 清水紀宏 (2006) 学校部活動の意義. 日本体育学会監, 最新スポーツ科学事典. 平凡社, pp.135-136.
- 杉山佳生 (2004) スポーツとライフスキル. 日本スポーツ心理学会編, 最新スポーツ心理学: その軌跡と展望. 大修館書店, pp.69-78.
- 杉山佳生・渋谷崇行・西田保・伊藤豊彦・佐々木万丈・磯貝浩久 (2008) 学校体育授業を通じたライフスキル教育の現状と展望. 健康科学, 30: 1-9.
- 杉山佳生・渋谷崇行・西田保・伊藤豊彦・佐々木万丈・磯貝浩久 (2010) 体育授業における心理社会的スキルとライフスキルを測定する尺度の作成. 健康科学, 32: 77-84.
- 高比良美詠子・安藤玲子・坂本章 (2006) 縦断調査による因果関係の推定—インターネット使用と攻撃性の関係. パーソナリティ研究, 15 (1): 87-102.
- 高坂康雅 (2013) 大学生におけるアイデンティティと恋愛関係との因果関係の推定: 恋人のいる大学生に対する3波パネル調査. 発達心理学研究, 24 (1): 33-41.
- 豊田秀樹 (2003) 統計ライブラリー共分散構造分析 [疑問編]—構造方程式モデリング—. 朝倉書店.
- 上野耕平 (2007) 運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得. 体育学研究, 52: 49-60.
- 上野耕平 (2011) 体育・スポーツ活動への参加を通じたライフスキルの獲得に関する研究の現状と今後の課題. スポーツ心理学研究, 38 (2): 109-122.
- 上野耕平・中込四郎 (1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究, 43: 33-42.
- 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議 (2013) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書: 一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して.
- 渡辺弥生・星雄一郎 (2009) 中学生対象のソーシャルスキルトレーニングにおけるセルフマネジメント方略の般化促進効果. 法政大学文学部紀要, 59: 35-49.
- Weiss, M. R. (1995) Children in sport: An educational model. In: Murphy, S. M. (ed.) *Sport psychology interventions*. Human Kinetics, pp.39-69.
- WHO: 川畑徹朗ほか監訳 (1997) WHO ライフスキル教育プログラム. 大修館書店.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 (2000) 共分散構造分析とその適用. 山本嘉一郎・小野寺孝義編, Amos による共分散構造分析と解析事例. ナカニシヤ出版, pp.1-22.
- 横浜市教育委員会 (2015) 横浜の部活動: 部活動の指針 (改訂版). <http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/bunya/gazo/bukatushishin2015.pdf#search=%27EF%BC%89%E6%A8%AA%E6%B5%9C%E3%81%AE%E9%83%A8%E6%B4%BB%E5%8B%95%EF%BC%9A%E9%83%A8%E6%B4%BB%E5%8B%95%E3%81%AE%E6%8C%87%E9%87%9D%EF%BC%88%E6%94%B9%E8%A8%82%E7%89%88%EF%BC%89%27>, (参照日 2017 年 5 月 5 日).

(2017 年 7 月 12 日受付)
(2018 年 4 月 17 日受理)